

「つながり」をいかした文化継承活動

—京田辺音楽連盟の事例から—

鈴木 りほ

はじめに

いま、日本で最も長い歴史と伝統を誇る交響吹奏楽団である大阪市音楽団は、大阪市の橋下徹市長の方針により廃止の危機に迫られている。市長は大阪市音楽団の市直営方式の廃止と職員の分限免職方針を示しており、楽団員との会合において、「音楽団の活動は文化なのか、行政なのか」と投げかけた。それに対して楽団員は「吹奏楽は非常に裾野が広く、教育活動や生涯活動の場として非常に有効。文化へ橋渡しする行政の一端としての活動に手応えを感じている」などと応じた¹⁾。

私がこの問題に対して興味深く感じたのは、自分自身が長年「吹奏楽」を経験してきたからである。私は中学1年生で吹奏楽に出会い、現在は京都府京田辺市の社会人吹奏楽団である大住シンフォニックバンドに所属している。京田辺市では、京田辺市文化協会の下部組織である京田辺音楽連盟により市民の音楽文化の向上とそれに伴う市の活性化がなされており、私の所属する団も京田辺音楽連盟の加盟団体として、京田辺市において文化を発信する団体の1つである。

「田舎」とよばれる京田辺市で音楽が栄え、「都会」とよばれる大阪市でいま、行政の活動における音楽の無力さが叫ばれている。本論では京田辺市における文化活動という事例から、文化活動が繁栄した経緯と問題点について京田辺市民の生の声をもとに考察し、大阪市音楽団の今後のあり方にも参考にできる事例を紹介したい。

京田辺市の音楽活動

(1) 市民の市民による市民のための音楽活動

京都府の南部、大阪府と奈良県の境目に位置する京田辺市では、市民による文化活動が盛んであり、中でも音楽活動は京田辺音楽連盟を中心に積極的に行われている。まず京田辺市において音楽活動が盛んとなった経緯を、京田辺音楽連盟副会長の児玉英己氏²⁾へのインタビューをもとに見ていきたい。

京田辺音楽連盟（以下、音連と記載）は1994年、同じ京都府の宇治市音楽連盟をモデルに、京田辺市文化協会の下部組織として、田辺町音楽連盟の名で結成された。（1997年に京田辺音楽連盟に改称。）「設立当初の目的は、京田辺市内に市民ホールを作りたいという複数の音楽サークルが持つ共通の意見を、団体として市に訴えることであった。（児玉1216）³⁾」と、児玉は語る。現実には、京田辺市にある同志社女子大学内の新島記念講堂が多目的ホールとして大学関係者以外の団体も使用できる状況にあるため、今もなおホールの設立は実現していない。しかしホールの建設は実現していないものの、京田辺市民の「声」により結成され、京田辺市民の「手」で運営されている音連が、京田辺市に与える影響は大きい。当初は7団体で発足された音連だが、2013年現在では合唱8団体、器楽5団体の13団体が加盟し、市内の音楽愛好団体相互の連携と交流をはかり、市民の音楽文化の向上に資することを目的に（京田辺音楽連盟規約第2条より抜粋）活発に活動している。

さて、音連は毎年10月に京田辺市民音楽祭を開催するなど、様々な音楽行事を主催しているが、そのために必要な費用はどのように調達しているのだろうか。この質問に対して、児玉は次のように述べている。

音連は構成員の会費を使って活動しています。音楽行事を開催することを通して会費を還元する形をとっているのですが、原則として市からの補助金はもらっていません。（児玉1216）

音連は、構成員から回収する会費によって生計を立てており⁴⁾、構成員に音楽活動の発表の場を提供することで、市民同士の音楽を通じた交流をはかっているのだ。なお、京田辺市文化協会の下部組織であるため、連盟の運営における練習施設の無料貸し出しなどといった市の協力はあるものの、原則として市からの金銭的補助はなく、あくまでも市民の市民による市民のための自主的な音楽団体であるといえる。

(2) 「先陣をきる人」と「つながり」

しかし、市へ依存することなく市民によって能動的に活動するためには、「先陣をきる人」の存在が不可欠であり、その人は「皆から信頼される人物」でなければならない。京田辺市には音連結成当時そういった人物が存在しており、彼らによる「つながり」が京田辺の音楽を活性化させたのだ。

京田辺で音楽がこうして栄えているのは、合唱の山田先生⁵⁾と器楽の尾崎先生⁶⁾の存在が大きいと思う。（児玉1223）

児玉は続けてこう述べている。

山田先生は、音連加盟団体の合唱団の多くを指導されています。今は、コール・ハレルヤ、薪女声コーラス、田辺少年少女合唱団コスモスの指揮・指導にあっているのかな。尾崎先生は、大住シンフォニックバンドの顧問で、京田辺市立桃園小学校ジュニアバンドの講師もされていましたね。「京田辺市の歌」の作曲をされたのも、山田先生と尾崎先生と登くんのお父さんですよ。(児玉 1223)

—合唱の山田氏と器楽の尾崎氏— 彼らが合唱と器楽の架け橋となり、音連の結成を円滑にしたらどう。「登くんのお父さん」とは、私が所属する大住シンフォニックバンドの団員の父親、登博美を指しており、京田辺市大住地区の音楽関係者であれば「登くんのお父さん」という言葉で誰のことを言っているのかが伝わるどころからも、京田辺市の地縁の深さが感じられる。

音連結成から約 20 年を経た今もなお、こうした彼らの地縁的「つながり」を原点に、音連の加盟団体間には私的な友好関係が多く、運営が破綻なく行える状況にある。例をあげると、「男声合唱団 K.M.C は、コール・ハレルヤと田辺混声合唱団の男性団員が集まって結成された合唱団(児玉 1223)」であり、「京都府議会議員の尾形賢が代表を務める K.C.B には、大住シンフォニックバンドの元団員が所属していたこともある(児玉 1223)」らしい。

(3) 「血縁」と「地縁」

また、京田辺市における音楽活動が、田舎特有の「血縁社会」の中で行われていることも、音楽文化が活性化した理由の一つだと言えるのではないだろうか。2004 年以降、尾崎氏の御子息である尾崎雅規氏が大住シンフォニックバンドの常任指揮者に就任、また彼の中高の同級生である片山賢治氏が大住シンフォニックバンドの現団長を務める。さらに、2 人は尾崎義典氏の大住中学校勤務時代の吹奏楽部員であり、大住シンフォニックバンドには彼らの中学・高校・大学時代の先輩・後輩も多く所属している。今回インタビューにご協力いただいた児玉も大住中出身であり、現指揮者や団長の中高の先輩である。さらに児玉は尾崎義典氏についてこう語っている。

尾崎先生は大住中の吹奏楽部顧問にして、うちの代の学年主任でした。洛南⁷⁾に推薦してくださったのも尾崎先生で、各種編曲を最初に依

頼してくださったのも尾崎先生です。足を向け寝られない仲ですね。
(児玉 0202)

音連加盟団体の構成員らは、「音楽連盟加盟団体」といった契約上だけの関係だけではなく、「血縁」と「地縁」が交わりあった密な友好関係をもっていた。これこそが京田辺市における音楽活動を円滑に活性化させる鍵となったのではないだろうか。それにくわえて、決して「都会」とは言えない京田辺市という土地での、市民の市民による市民のための音楽活動であったからこそ、自治体からの圧力もなく活動されてきたのかもしれない。

京田辺音楽連盟が抱える新たな問題

先述した通り、音連は原則として構成員から徴収した会費を使用して独自の音楽活動を行っているが、市からの援助を全く受けていないわけではない。京田辺市文化協会下部組織である音連は、文化協会の登録料を支払う⁸⁾特典として、1週間に1回京田辺市内の住民センターの1部屋1区分(午前・午後・夜間)を無料で借りることができる⁹⁾。一方で、NPO法人京田辺市社会体育協会は、規則に従って一部減免の恩恵を受けているものの、基本的には全登録団体が、有料公園施設等の利用において使用料を支払っている。さらに、東日本大震災の復興や社会保障への財源捻出のために、国庫補助事業予算が削減され、大幅な財源不足が予測される中、京田辺市内でも可能な限りの経費削減を推進されている¹⁰⁾。

こういった状況にあるため、現在京田辺市では、文化協会加盟団体からも、社会体育協会と同様、施設使用料を徴収すべきだという議論がなされている。くわえて、「現京田辺市長の石井明三氏は、選抜高等学校野球大会に出場経験があるほどの、野球少年であったこともあり、文化協会が圧倒的優位な立場にある京田辺市の現状に対して否定的印象を持っているのではないかといった声もある(児玉 1216)」と、児玉は語る。今後、音連を含む京田辺市文化協会は、市からのより一層の「自立」を余儀なくされることになるだろう。

「つながり」をいかして

京田辺市はいまこうした新しい問題を抱えている。しかし、これまで京田辺市では「田舎」ならでの「血縁」「地縁」による「つながり」によって、音楽文化の活性化が市による圧力なく着実に行われてきた。そうい

った中で、文化協会加盟団体に無料で貸し出されている京田辺市の施設は「有料化すべきもの」なのだろうか。私は今後も住民センターの無料貸し出しを続けるべきであると考えている。文化協会加盟団体に営利目的の団体は存在しておらず、どの団体も自らの技術向上とそれを市民に発表することによる音楽文化の活性化、なにより京田辺市の更なる発展のために活動しているため、市による多少の援助は継続すべきだと考えるからだ。



私は先日、大住シンフォニックバンドが普段練習会場として利用している北部住民センターでの「寒さを吹っ飛ばせ！吹奏楽コンサート」(左の写真:2013年1月27日)に出演した。このコンサートは、「参加型コンサート」と称しており、老若男女問わず楽しめる様、アニメの主題歌

や童謡、大人が懐かしむことのできるような昭和の歌謡曲など、様々なジャンルの音楽を演奏し、時には歌や踊りもくわえることで、観客も一緒にコンサートに参加できるようなプログラムになっている。団員の奏でる音楽に合わせて歌を口ずさむ子どもたちや、彼らを満面の笑みで眺めるその両親の様子を見ていると、この演奏会が団員だけでなく京田辺市民にとっても、大きな意味をなすことができているのではないだろうか、と実感することができた。こういった行事を通して普段使用している練習会場を「披露の場」として使用し、地域住民へ「お返し」をすることもまた京田辺市特有の地縁的「つながり」を継承するためには不可欠ではないだろうか。

「今後、京田辺市における経費削減が、どのような形で行われるかはまだ決定していないが、文化協会加盟団体も、何らかの形においてその影響を受けざるを得なくなることが予想されている。(片山 1227)」そういった局面を乗り越えるためにも、各団体が自らの活動による京田辺市民への良い影響を少しでも増やしていくことで、市へ「音楽活動の意味」を訴えることが必要だろう。今こそ京田辺市特有の「つながり」をいかして、一致団結すべき時なのではないだろうか。

おわりに

—「田舎」とよばれる京田辺市で音楽が栄え、「都会」とよばれる大阪

市でいま、行政の活動における音楽の無力さが叫ばれていること―

京田辺市では、田舎特有の「つながり」をいかして音楽が栄え、同時に市の活性化が行われてきた。いま、大阪市音楽団の直面している危機に関して、児玉はこう語っている。

橋下市長の「音楽団廃止」の発言により、市民の危機感が強まり、文楽への関心が高まっていることも事実。いま誰が音頭をとるのか？が重要であり、大阪市が変わるチャンスなのではないか。(児玉 1216)

たしかに、財政困難な状況にあり経費削減が謳われる中でいつまでも大阪市音楽団が市の直営方式であり続けることは困難であるかもしれない。しかし、大阪市は現在の状況を消極的にとらえるのではなくチャンスとしてとらえ、京田辺市で音楽が栄えたときのように、誰かが先陣をきり困難を乗り越えるために積極的に動き出すことも可能だろう。ただし「血縁・地縁社会」が残る「田舎」とよばれる京田辺市と、「血縁・地縁社会」からは程遠い「都会」とよばれる大阪市では根本的に土地条件が異なっている。今後の大阪市音楽団のあり方を考えるにあたって、京田辺市の事例が参考になれば幸いである。

―逆境でこそ人は強くなれる― 今後の京田辺市や大阪市での音楽活動の更なる発展を願いたい。最後にインタビューに協力していただいた、児玉英己氏、片山賢治氏に厚くお礼申し上げる。

注

- 1) 『産経新聞』2012.5.7
- 2) 京田辺音楽連盟副会長兼広報(京田辺音楽連盟では、各サークル2名以上の委員選出が義務付けられており、児玉氏は大住シンフォニックバンドの代表者として参加している)。趣味は作曲・編曲活動。
- 3) 児玉氏のインタビューは2012年12月16日・2012年12月23日・2013年2月2日に行った。以下、1216・1223・0202とする。同様に、片山氏のインタビュー(2012年12月27日実施)は、1227と記載。以下必要に応じて敬称は省略する。
- 4) 京田辺音楽連盟規約(会費)第16条:会費は、1団体毎年額3,000円及び会費一人当たり大人1,000円・高校生以下500円とする。但し、必要に応じて、特別会費を徴収することができる。
- 5) 山田晏子:京田辺市出身の音楽家。京都市立堀川高校音楽課程(現在市

立音楽高校)を経て、京都市立音楽短期大学(現在芸術大学)声楽科を卒業。今日までリサイタルや数多くのコンサートに出演している。

- 6)尾崎義典:京都市立芸術大学音楽部を卒業後、滋賀県の私立比叡山中学校・高等学校、京都府内の小学校・中学校で勤務し、多くの吹奏楽部の創設・指導にあたる。吹奏楽コンクールでは金賞、また府県の代表として関西大会に数多くの吹奏楽部を出場させた。2011年11月25日永眠。
- 7)京都市の洛南高校を指す。児玉の高校時代、洛南高校吹奏楽部は、全国大会に出場するほどの有名校であった。
- 8)これについての規約は以下の通り。「京田辺市文化協会連盟登録規約第6条:本会の連盟登録料は、年間10,000円とする。」
- 9)これについての規則と別表は以下の通り。

「京田辺市立住民センターの設置及び管理運営に関する条例施行規則(平成14年7月26日規則第28号)(使用料の減免)第9条:使用料を減免する特別の理由及びその減免率は、別表のとおりとする。」

別表(第9条関係)

使用料を減免する特別の理由及び減免率

特別の理由	減免率	
	施設使用料	冷暖房料
京田辺市又は京田辺市教育委員会が主催する事業	10割	10割
京田辺市が指導・援助している団体が行う事業	10割	10割
社会教育団体等に属する団体の活動及び住民センター登録サークルの活動	10割	5割
京田辺市又は京田辺市教育委員会が後援する事業	5割	5割
上記団体以外で公共性を有する団体の活動	5割	—
その他市長が特別の理由があると認める事業	市長が相当と認める減免率	

http://www.kyotanabe.jp/reiki/reiki_honbun/k113RG00000277.html

- 10)「平成24年度 施政方針 京都府京田辺市」参照

http://www.kyotanabe.jp/cmsfiles/contents/0000003/3891/H24_houshin.pdf



尾崎義典先生追悼コンサート（大住シンフォニックバンドのHPより）

私は今回、「インタビュー形式」での論文に初挑戦しました。幸いなことに、インタビューを依頼した児玉さんと片山さんが、私の所属する大住シンフォニックバンドの団員ということで、もともと顔見知りの方でしたので、比較的スムーズにインタビューを行うことができました。本来なら、私自身で京田辺市役所を訪問して京田辺市文化協会とNPO法人京田辺市社会体育協会の市による援助の状況を調べたり、京田辺音楽連盟の代表者の連絡先を一から調べてインタビューのアポを取ったり・・・などとしなければならないところだったと思いますが。

しかし、論文の制作にあたり、様々な試行錯誤を繰り返しました。京田辺市におけるスポーツと比較したときの音楽の優位性を裏付けるため、2012年7月から9月の京田辺市立北部住民センターの使用団体を全て調べ上げ、「これで行政のスポーツと音楽への力の入れ具合の差が見えてくるだろう！」と期待して何時間もかけて分析したものの、決定的な情報は見つからず・・・。執筆を投げ出したくなった瞬間でしたね！

とはいえ、インタビューの回数を重ねるうちに、京田辺市民の「本音」を聞き出すことができ、新しい「ネタ」を入手するたびに論文執筆が驚くほどに楽しくなりました。快く、吹奏楽団の練習時間の合間に、京田辺市の音楽事情を話してくださったお二人に感謝の気持ちでいっぱいです。

鈴木りほ